



丹羽会長(右)と西条の名水で作った「水出しコーヒー」を飲みながら西条の水事情を説明する伊藤市長

ことでいえば、日本で最後に生き残るのは西条市かもしれないですね(笑)。
市長 いえ、やはり湧水と言いましても限りある資源ですから。

西条市では現在「水資源対策調査研究会」を発足させ、水道用水、農業用水、工業用水のすべてを対象に10年から30年に渡って西条市全体の水需給計画や市内にある工業用水ダムである黒瀬ダムの水を活用した地域活性化策、地下水への影響などの検討を行っています。

この黒瀬ダムは県営ダムなのですが、最大貯水量3千万トンのうち工業用水は日量

22万9千トンありますが24・5%しか使用されておらず、そのうえ赤字経営です。調査によって、このダムから加茂川に流れる水の85%が地下水涵養に重要な役割を果たしていることがわかりました。西条市にとつては命綱ともいえるダムですから、その必要性

重要性は強く認識しています。やはり西条市は、財産である水を活用することで利益を生み、その利益を山の再生に使い、山や木を守ることで豊かな水を守る。このことで市民生活を守ることができると。そう強く信じています。

丹羽会長 水は売らないのですか。水売って市民に還元すればいいのですか。
市長 3億トンが地下に眠っているといいますが、200年持つという保証はありません。お話ししましたように黒瀬ダムとの関係もありますから。

私としては、水を活用するという点から、やはり水を必要とする利水企業を西条に集めたいですね。

丹羽会長 ビール産業などの食料関係は水を必要とする産業ですね。

市長 現在、西条市では「食品加工流通コンビナート構想」というものに取り組んでいます。その核となつてい

ますのが水素吸蔵合金を使った省エネ型冷凍・冷蔵システムです。この技術を活用し、農水産品を集荷・加工・貯蔵し、消費地に供給するシステムを構築しながら、更には食に関する研究所の設置など

によって農水産業・食品製造業など食料産業の雇用の増加、西条ブランドの確立をめざしています。

私は生活するための豊かな水文化があつてこそ、食文化があると考えています。

丹羽会長 いずれにしても地盤沈下には気をつけたいといけません。世界ではよくあるのですが、こちらがどんどん使えば、どこかの地下水が枯渇する、または地盤が沈下する。このような問題が起これば、どんなに素晴らしい水事業であつても中止せざるを得ません。

市長 本当にそのとおりですね。

西条市では100万坪の埋立地に工場を集中させ、しっかりと住工分離をしています。

しかし、これとは別に工場の水のリサイクルは、今後やらなければいけないと考えています。

実際、瀬戸内側は10年前よりも降雨量が10%落ちています。しかし四国は7割が山です。急峻であつても松山の西にある大洲市などは、山で降った雨が豊かな平地を持つ一級河川の肱川に流れ込み、必ず地下に潜っているはずで

す。高知など太平洋側の年間雨量はすごいのですが、ほとんどが太平洋に流れ出てしまつています。

丹羽会長 そういうことであればやはり四国全体の水事業をどうバランスをとつて起こしていくのかがポイントになりますね。さらに農業の持つ保水・治水機能を活かすということも考えるべきでしょうね。

市長 西条市には豊富な水資源に加えて、食料自給率70%という広大な農地という資産があります。裸麦、愛宕柿は全国一の生産地でもあります。また工業出荷額でも平成16年の工業統計調査では四国で1位となつています。私は就任以来、自立・自活・

自己責任・自己決定のまち、「地産地消」「地産地商」「地産知商」、地域で生まれたものは地域でやろうと、これこそが真の地域通貨であると3年前からやっております。ぜひ、ローカル経済の確立を実現したいのです。

丹羽会長 弊社でも地方の自治体と連携を持ったり、地場企業への支援を手がけていますが、やはり地方の中小企業が元気になるかといけません。数の上で0・3%ほどしかない大企業がいくら元気になるんでも、日本全体の景気はよくはなりません。

市長 丹羽会長にそう言つていただけると私も励みになります。本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。

